



Title	看護におけるコミュニケーション・チャンネルの研究：検査場面での身体接触の効果
Author(s)	宮島, 直子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 11, 37-48
Issue Date	1998-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37641
Type	bulletin (article)
File Information	11_39-48.pdf



[Instructions for use](#)

原 著

看護におけるコミュニケーション・チャンネルの研究 — 検査場面での身体接触の効果 —

宮島 直子

Research on Communication Channels in Nursing — Effects of Physical Contact during a Check-up —

Naoko Miyajima

Abstract

The purpose of this research is to determine the effects of physical contact on personal communication during a check-up.

The subjects were 54 female students from H University who had been questioned as to their personal uneasiness, dependency and social skills. During a staged check-up, which involved taking the student's skin temperature, a co-experimenter made physical contact with randomly chosen subjects by supporting their hands. After taking their temperature, personal attraction to the co-experimenter was measured using a 12-item questionnaire. Each question measured student's responses on a 5-point Likert Scale.

The findings showed that the effects of physical contact were influenced by the receiver's dependency and personal uneasiness as psychological traits. Particularly on the item "Reliable," the highly dependent group gave the check-up with physical contact a significantly higher rating than that without physical contact; physical contact turned out to be an important nursing channel.

Physical contact could be considered an ambivalent channel, having both negative and positive aspects.

Key Words: Physical Contact, Skin Temperature, Personal Attraction, Communication Channel, Check-up Scene

要 旨

本研究は、検査場面での身体接触が対人コミュニケーションに与える効果を測定すること

を目的とする。

被験者は、H大学の女子大学生54名。事前に対人不安度、依存性、社会的スキルを調査している。検査場面（皮膚温の測定）を設定し、実

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

験協力者1名が無作為に選んだ被験者に対して手を支えるという身体接触を行なった。測定終了後、実験協力者に対する対人魅力をリッカート法12項目5段階評定により求めた。

結果として、身体接触の効果は身体接触を受ける者の心理的特性としての依存性や対人不安の程度に影響を受けることが確認された。特に「信頼できる」という項目は、依存性の高い群では身体接触のある場合を身体接触の無い場合よりも有意に高く評定しており、身体接触が看護場面において重要なチャンネルとなることが確認された。

また身体接触は、ネガティブな側面とポジティブな側面を持つアンビバレントなチャンネルといえた。

キーワード：①身体接触 ②皮膚温 ③対人魅力 ④コミュニケーション・チャンネル ⑤検査場面

はじめに

看護者にとって、患者と良好な対人関係（信頼関係）を成立させることは重要であり、多くの関心を寄せる場所である。特に近年においては、少子・高齢化という社会状況の変化に伴い、医療経済の財源確保対策の一端として、入院期間の短縮や在宅療養化が推進されている。それに対応し看護者は、患者と短期間に良好な対人関係を成立させる技術が求められる。そこで、基本的な対人関係のプロセスとシステムに照らしあわせて、改めて看護におけるコミュニケーション・チャンネルについて考える必要性が浮かび上がった。

大坊（1990）は「対人関係が具体的に展開する過程はコミュニケーション・チャンネルを通じた相互のメッセージの交換と自分の持っている多くのルールに基づき、得られた多様な情報を認知し、統合していく過程である。」としてい

る。中でも非言語的チャンネルは、意識的に全てのチャンネルを統制することが難しく、真意を伝えるという点で重要視される。主な非言語的コミュニケーション・チャンネルとして視線、表情、身体の動き、姿勢、音声、身体接触などがあげられる。そして、それぞれのコミュニケーション・チャンネルには特徴があるが、その中でも身体接触は注目されるチャンネルである。その理由は、コミュニケーションは親密さの原因であり、結果となる循環的過程であるため、他者との親密さを持つことは、対人関係の成立・維持・展開にとって必要かつ重要とされる。身体接触はその親密さをコミュニケーション過程において最も増大させると考えられるからである。

そして、身体接触はわが国の社会生活において非日常的であるのに対して、看護援助では欠かせないという特徴からも、その効果を検討する意義がある。

研究目的

身体接触の効果を測定する。特に身体接触に意味を与える要因を可能な限り統制することにより、本来備えている身体接触自体の効果をより明確にする。今回、条件統制がとりやすい検査場面を設定した。

仮説は「身体接触の効果は受ける者の心理的特性によって異なる。身体接触は親和欲求（親密さを求める）を充足させるため、依存性が高い者に対してはポジティブにはたらく。」とした。

後天的獲得能力として社会的スキルとの関係についても検討する。

研究方法

被験者：札幌市内のH大学学部生、女性54名（平均年齢20.1歳、SD=1.59、最高年齢22歳、最低年齢19歳）。この内身体接触を受ける者を無作為に選択したが、身体接触群27名、非身体

接触群 27 名とした。

実験協力者(身体接触を行なう者)：1 名、被験者とは同性・同年代で初対面の関係とした。

実験手続き：被験者へは実験 1 週間前に質問紙調査を行なった(付表参照)。

質問紙調査の内容は、押見ら(1986)による Self Consciousness Scale(以下 SCS とする)の下位尺度である対人不安尺度の 7 項目、辻(1969)による Dependency Scale(以下 DS とする)の 20 項目、堀毛(1994)による ENDE 2 尺度 15 項目の計 42 項目とした。

被験者に対しては、実験への参加の依頼時に「皮膚の温度を測定させていただきます。また、測定後に簡単なアンケートにも答えてください」と説明した。実験室の配置は図 1 である。皮膚温

を測定する場面では「測定のお手伝い」役の実験協力者が、無作為に選ばれた身体接触群の被験者に対して、測定時に身体接触を行なった。身体接触の仕方は、被験者が測定のポーズをとった時に実験協力者が被験者の右斜め後方から右手で軽く被験者の右手首を支えるようにした。接触の持続時間は 5 秒間とした。皮膚温の測定は、被験者の顔面と両手掌の皮膚温をコンピューターに画像として取り込んだ。測定機器は INFRA EYE 1200 (FUZITSU) を使用した。測定時のポーズは座位で両手のひらを顔の高さまで拳上し、前面を向けるようにした(図 2 参照)。測定間隔は椅子に座ってから 1 分後、2 分 30 秒後、3 分後とした。身体接触は身体接触群に対して、2 回目と 3 回目に行なった。

実験協力者は、身体接触群と非身体接触群の両方に対して、測定に関する説明を台本に基づいて行なった。測定終了後に実験者が、被験者に対して本実験が初対面の印象についての実験であったことを説明し、実験協力者についての魅力評定を質問紙により求めた。また、調査結

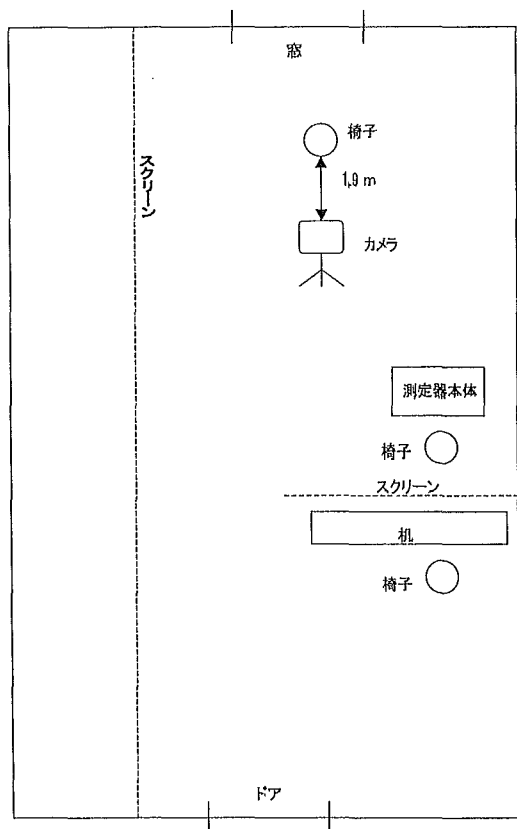


図 1 実験室の配置

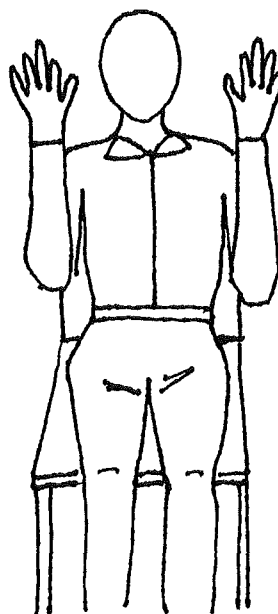


図 2 測定ポーズ

果は統計処理を加え、個人のデータは問題にしないことを伝えた。

実験室の環境は、室温 22~24°C、湿度 60% だった。部屋の扉は 2 重になっており騒音による影響はなかった。

実験協力者には、身体接触以外には極力同じ印象を与えるため、以下のことを了解してもらい、協力を得た。①実験衣を着用する。②装飾品はつけない。③化粧や髪型は極力同じにする。④香水はつけない。

被験者に対する説明は、台本に基づいて行なったが、事前に繰り返し練習をして、どの被験者に対しても同じような説明ができるようにした。

実験協力者の決定にあたっては、実験協力候補者 6 名 (A, B, C, D, E, F) の脱帽正面で上半身の写真 (カラー) を使用し、それぞれについての対人魅力評定を調査した。撮影にあたっては次のように条件を統一した。①服装は調査者側で用意した実験衣を着用する②装飾品はつけない③表情はそれぞれの自然な表情とした。

調査対象は、札幌市内の H 短大 2 年次の女子学生 80 名から無作為に抽出した 40 名 (平均年

齢 20.2 歳, SD=0.94, 最高年齢 24 歳, 最低年齢 19 歳), 実験協力候補者とは同性・同年代で初対面の関係とした。

対人魅力はリッカート法 12 項目 5 段階評定により求めた (付表参照)。質問項目は、藤森 (1980) の魅力尺度項目から 3 項目、林 (1988) の対人認知の構造尺度項目から 2 項目、松尾 (1994) の感覚モダリティ間の比較に使用した尺度項目から 3 項目、同性・同年代の初対面の印象に相応しいと判断した 4 項目を加えた 12 項目とした。

写真の提示は、順序効果を考慮して調査者が適宜変えた。

調査結果より、実験協力者は対人魅力評定において偏りが少なく、6 人の実験協力候補者の平均値に近いという特徴がある E さんに決定した。

結 果

1. 対人魅力を従属変数とした分析結果

実験協力者に対する対人魅力評定の 12 項目について主因子法による因子分析を行なった。ガットマン基準に基づき固有値が 1 以上の 3 因子を抽出し、バリマックス回転を行った (表 1

表 1 対人魅力評定尺度の因子分析における因子負荷量

主因子法, バリマックス回転

項 目	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	共通性
温かい	0.74297	0.22625	0.07143	0.608
感じがよい	0.73288	0.21586	-0.03520	0.585
好ましい	0.68747	0.27853	0.15032	0.573
親しみやすい	0.68427	-0.02700	0.51581	0.735
人なつっこい	0.51531	0.09707	0.25857	0.342
誠実である	0.18486	0.72912	0.04248	0.568
正直である	0.08751	0.71424	0.13276	0.535
安心して頼みごとができる	0.35494	0.54331	0.19076	0.458
信頼できない	-0.05898	-0.44412	0.00223	0.201
気が合いそうだ	0.40856	-0.13826	0.57355	0.515
気がねがない	0.18255	0.41847	0.45360	0.414
消極的である	-0.00222	-0.06160	-0.19205	0.041
固有値	2.667	1.918	0.989	5.574
説明率 (%)	22.23	15.98	8.24	46.45

参照)。3 因子による分散説明率は 46.5% であった。

第 1 因子は「温かい」「感じがよい」「好ましい」「親しみやすい」「人なつこい」の 5 項目より構成され、共通因子は「個人的親しみやすさ」と考えられた。第 2 因子は「誠実」「正直」「安心して頼みごとが出来る」「信頼出来る」(「信頼出来ない」の逆転項目) の 4 項目より構成され共通因子は「社会的望ましさ」と考えられた。第 3 因子は「気が合いそう」「気がねがない」「積極的」(「消極的」の逆転項目) の 3 項目より構成され、共通因子は「付き合いやすさ」と考えられた。

それぞれの因子の総合得点について、身体接触の有無と対人不安得点の高中低を被験者間要因とする 2×3 の 2 要因の分散分析および身体接触の有無と DS 得点の高中低を被験者間要因とする 2×3 の 2 要因の分散分析を行なった。それぞれの得点の高中低の区分の仕方は、度数分布上ほぼ 3 等分になるように決定した。つまり、得点を昇順化した度数分布の累積割合を指

標として、33.3%以下を「低」、33.3%から 66.6%を「中」、66.6%を越える場合を「高」とした。

その結果、身体接触の有無の主効果に有意な差は認められず、一部交互作用に傾向差を認めた。第 1 因子では、身体接触の有無と対人不安得点の交互作用で傾向差を認めた ($F(2, 48) = 2.87, p < .1$)。また、第 2 因子では、身体接触の有無と DS 得点の交互作用で傾向差を認めた ($F(2, 48) = 2.45, p < .1$)。そこで更に、対人魅力評定を従属変数とし、12 項目それぞれについて同様に 2 要因の分散分析を行なった。身体接触の有無の主効果で有意な差は認められなかったが、一部交互作用で有意な差および傾向差を認めた。

身体接触の有無と対人不安得点を要因とする分析結果では、項目 5 (温かい) において交互作用に有意な差を認めた ($F(2, 48) = 4.51, p < .05$)。「対人不安が低い群」において、身体接触が無い場合が有る場合より高い平均値であった(表 2, 図 3 参照)。また、項目 11 (誠実

表 2 項目 5 についての対人魅力得点に関する 2 要因の分散分析の結果の要約表 (身体接触の有無, 対人不安得点)

Source	DF	Squares	Square	F Value	Pr > F
TOUCH	1	0.46296296	0.46296296	0.68	0.4144
ANXIETY	2	3.07070707	1.53535354	2.25	0.1166
TOUCH*ANXIETY	2	4.51755652	2.25877826	3.31	0.0451*
Error	48	32.78210678	0.68296056		
Corrected Total	53	40.83333333			

† $P < .1$ * $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$ ANXIETY=対人不安得点

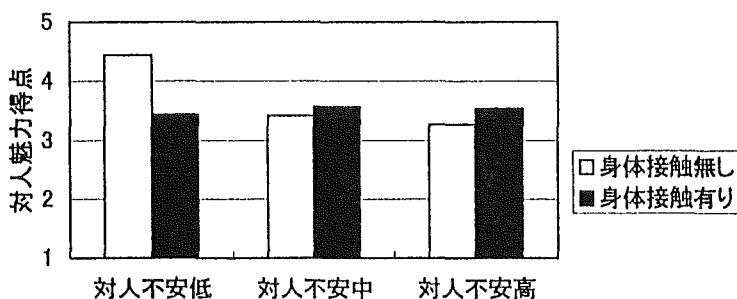


図 3 項目 5 (温かい) の平均値

さ)において交互作用に有意な差を認めた(F(2, 48)=4.31, p<.05)。「対人不安が低い群」において、身体接触が無い場合が有る場合より高い平均値であった。逆に「対人不安が高い群」において、身体接触が有る場合が無い場合より高い平均値であった(表3, 図4参照)。

表3 項目11についての対人魅力得点に関する2要因の分散分析の結果の要約表(身体接触の有無, 対人不安得点)

Source	DF	Squares	Square	F Value	Pr>F
TOUCH	1	0.01851852	0.01851852	0.05	0.8220
ANXIETY	2	0.26070226	0.13035113	0.36	0.6993
TOUCH*ANXIETY	2	3.11784512	1.55892256	4.31	0.0190*
Error	48	17.36219336	0.36171236		
Corrected Total	53	20.75925926			

†P<.1 *P<.05 **P<.01 ***P<.001 ANXIETY=対人不安得点

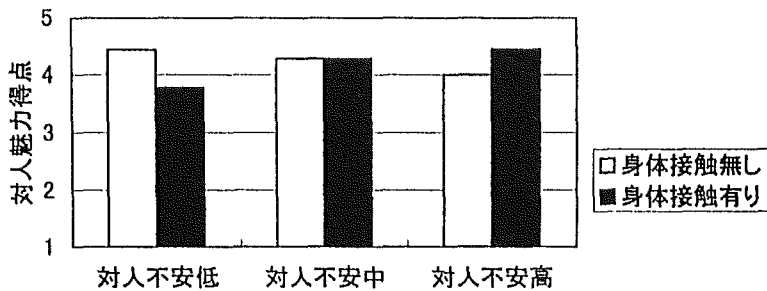


図4 項目11(誠実である)の平均値

表4 項目4についての対人魅力得点に関する2要因の分散分析の結果の要約表(身体接触の有無, DS得点)

Source	DF	Type II SS	Mean Square	F Value	Pr>F
TOUCH	1	1.14633610	1.14633610	1.80	0.1855
DEPENDENCY	2	1.07638889	0.53819444	0.85	0.4350
TOUCH*DEPENDENCY	2	7.75932540	3.87966270	6.11	0.0043**
Error	48	30.49761905	0.63536706		
Corrected Total	53	40.83333333			

† P<.1 *P<.05 **P<.01 ***P<.001 DEPEND=DEPENDENCY=DS得点

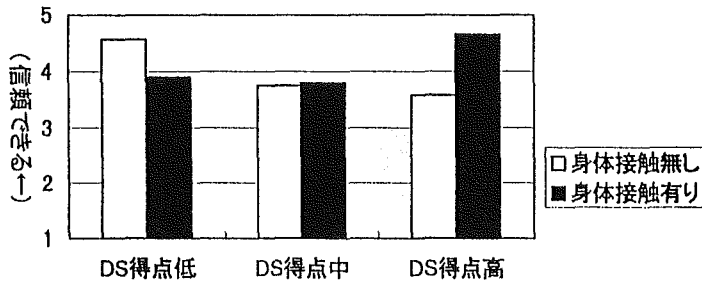


図5 項目4(信頼できない;逆転)の平均値

次に身体接触の有無と DS 得点を要因とする分析の結果では、項目 4（「信頼できない」の逆転項目）において交互作用に有意な差を認めた ($F(2, 48) = 6.11, p < .01$)。「DS 得点の高い群」において、身体接触の有る場合が無い場合より高い平均値であった(表 4, 図 5 参照)。DS 得点については更に「道具的 DS 得点」と「情動的 DS 得点」に分けて分析を行なった。「道具的 DS 得点」では、項目 4（「信頼できない」の逆転項目）において交互作用に有意な差を認めた ($F(2, 48) = 5.75, p < .01$)。「道具的 DS 得点の高い群」において身体接触が有る場合が無い場合より高い平均値であった。また、項目 5（温かい）において交互作用に有意な差を認めた ($F(2, 48) = 3.70, p < .05$)。「道具的 DS 得点の低い群」において、身体接触の無い場合が有る場合より高い平均値であった。

ENDE 2 得点の高中低を要因とする分散分析では、項目 9（正直である）において身体接触の有無と ENDE 2 得点の高中低を要因とする分散分析では、項目 9（正直である）において身体接触の有無と ENDE 2 得点との交互作用に有意な差を認めた ($F(2, 48) = 6.04, p < .01$)。「ENDE 2 得点の低い群」において、身体接触のある場合が無い場合より高い平均値であった。

2. 皮膚温を従属変数とした分析結果

測定した皮膚温のデータは、エリア機能を使用し、5 エリアにおける最高温度、最低温度、平均温度を数値化した。指定したエリアは右手掌、左手掌、前額部、額部、左頬部の 5 ヶ所である（図 6 参照）。

分析は、各エリアの 1 回目と 2 回目の平均皮膚温の変化量の比 (= (2 回目の平均値 - 1 回目の平均値) / 1 回目の平均値, 以下「皮膚温の変化量の比」とする。) を従属変数にした。そして身体接触の有無と対人不安得点の高中低および身体接触の有無と DS 得点の高中低を被験者

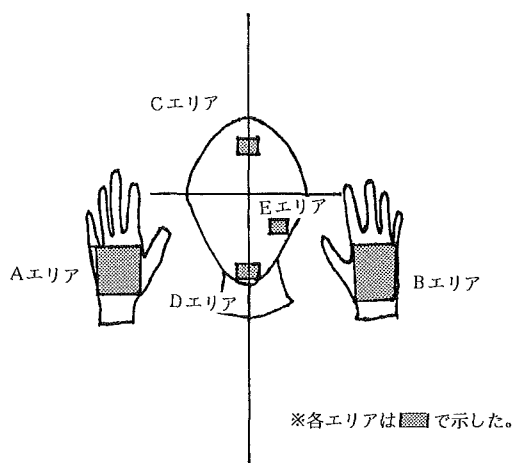


図 6 皮膚温測定エリア

間要因とする 2×3 の 2 要因の分散分析を行なった。身体接触の有無の主効果で有意な差を認めたのは、A エリア ($F(2, 48) = 5.01, p < .05$) と E エリア ($F(2, 48) = 6.09, p < .05$) であった。

考 察

Patterson の「対人的親密さに関する覚醒モデル」(図 7 参照)を手がかりに本実験での身体接触の効果について検討する。

被験者と実験協力者の二者関係において、実験協力者が被験者に対して身体接触を行なうことは、一種の親密性の変化を生じさせたと考えられることができる。この身体接触による親密性の変化が被験者に生理的覚醒の変化を引き起こしたことは、指標としての皮膚温が、A エリアと E エリアにおいて有意に変化したことから確認される。身体接触により皮膚温は低下した結果となったが、これは身体接触が一種のストレスとして働いて、交感神経を刺激し血管を収縮させた結果であると考えられる。Patterson のモデルでは、この生理的覚醒については増大あるいは減少としており、増大であることまたは減少であることの方性は問題としていない。

次のステップである情動のラベルづけについ

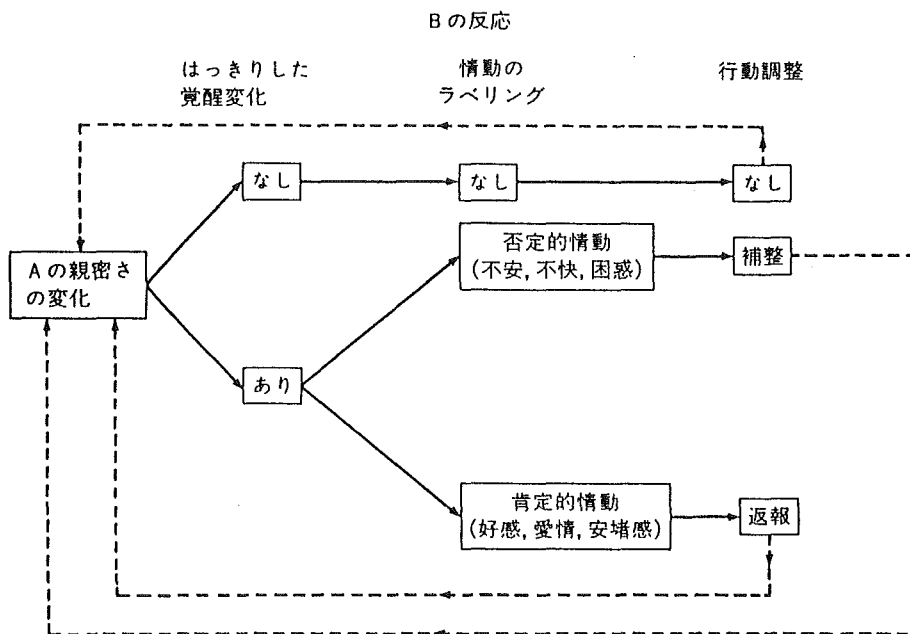


図7 対人的親密さに関する覚醒モデル
(M.L. Patterson 著, 工藤力監訳: 非言語コミュニケーションの基礎理論, P.20, 誠信書房, 1995, 東京, より引用)

では本実験では、客観的データとして得られないところで、行動の適応から逆に推測してみる。行動の適応は、情動のラベルづけがネガティブなら補整、ポジティブなら返報されるはずである。本研究はこの行動の適応については身体接触を行なった実験協力者への対人魅力評定値を基にして推測する。つまり、行動の適応として補整の場合は実験協力者への対人魅力評定が低くなり、返報の場合は逆に実験協力者への対人魅力評定が高くなると考えられる。

まず、対人不安得点の高中低別に実験協力者への対人魅力評定をみる。質問紙調査の結果から対人不安得点の低群において、項目5「温かい」と項目11「誠実である」の得点が身体接触群で非身体接触群より有意に低い値を示した。このことは、対人不安得点の低群においては身体接触がネガティブに働いたと考えられる。しかし、項目5「温かい」の平均得点を身体接触の有無別と対人不安の高中低別にみると、対人不安得点の低群の非身体接触群が際立って高い

値となっている。松尾(1994)は「親愛感の知覚における視覚・聴覚・触覚間の優先関係」の調査報告において、「暖かい」の評定が触覚条件で高くなっているがこれは相手の人柄ではなく物理的な手の温度を反映している可能性があることを述べている。本実験においても、実験協力者の手の温度が反映されていることは十分考えられる。対人不安とは「他人がいる場面で動揺しやすい性質」であるため、実験協力者の存在自体が被験者にストレスを与え、交換神経の緊張が血管を収縮させることによって、皮膚温を低下させたということも考えられる。

そこで被験者の操作前のデータとしての第1回目のAエリア(右手:身体接触を受けた側)の平均温度を対人不安得点の高中低別に比較した。結果は、対人不安得点高群の平均温度は28.99°C(SD=1.61)、中群で29.14°C(SD=1.85)、低群で29.45°C(SD=1.89)であった。

実験協力者の右手(接触を行なった側)の温度は実験開始前に測定しており、29.1~32.2°C

であった。時間の経過とともに変動が考えられるため、あくまでも参考程度であるが、被験者の測定結果と比較して冷感を与える値ではないと考える。よって今回の結果において、項目5「温かい」の評定に物理的温度が反映しているとは言い難い。

次に対人魅力評定(項目4)では、DS得点高群において有意に高く、身体接触という親密性の変化がポジティブにラベルづけられたことが推測される。DS得点高群において親密性の変化がポジティブにラベルづけられたことは、仮説を支持するものである。DS総合得点は親和性と有意な相関があり、DS得点の高群は親和欲求が強いと考えられる。そこで身体接触のような親密性を高める行為はポジティブにラベルづけられたと考えられる。

松尾(1994)は、接触がポジティブーネガティブ両面の可能性を持つアンビヴァレントな感覚モダリティであることを報告しているが、本実験もそれを支持する結果となった。また「もともと非接触文化を保持する日本人は接触を不快に感じやすい」と考察しているが、乳幼児期の養育態度においてわが国は母子密着型とされている。乳幼児期に濃厚な身体接触を通して親子の絆が得られた体験より、身体接触を一概にネガティブにとらえているとは考え難い。わが国における対人関係には親密な関係と親密でない関係においては異なる側面があることから、それぞれの側面について更に検討を要する問題であると思われる。

今回社会的スキル得点と実験協力者への対人魅力評定との関係に一定の傾向は認められな

かった。しかし、社会的スキル得点とC, D, Eエリアの皮膚温の変化量の比では、いずれも「低群」において身体接触ありとなしにおいて差が大きかった。このことは、社会的スキルの高さは、対人的動揺を鎮め身体接触による生理的覚醒の変動を抑制するためではないかと考えらる。

謝 辞

本研究の実験にあたり、ご協力いただきました被験者の皆さんならびに実験協力者に心から感謝いたします。(本研究は、平成9年度 北海道大学医療技術短期大学部の研究助成金により行なった。)

引用文献

- 大坊郁夫, 安藤清志, 池田謙一編: 社会心理学パー
スペクティブ2. 64-66, 誠信書房, 東京, 1990,
藤森立男: 態度の類似性・話題の重要性が対人魅力
に及ぼす効果—魅力次元との関連において. 実
験社会心理学研究, 20: 35-43, 1980.
林 文俊, 大橋正夫, 廣岡秀一: 暗黙裡の性格観に
関する研究(I). 実験社会心理学研究, 23: 9-
25, 1983.
堀毛一也: 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル.
実験社会心理学研究, 34: 116-128, 1994.
松尾香弥子: 親愛感の知覚における視覚・聴覚・触
覚の間の優先関係. 社会心理学研究, 10: 64-
74, 1994.
押見輝男: セレクション社会心理学2, 自分を見つ
める自分, 自己フォーカスの社会心理学. 49-
53, サイエンス出版, 1992, 東京.
辻 正三: 「依存性テスト」の検討. 東京都立大学人
文学報, 67: 11-23, 1969.

付表 使用した質問紙

以下の文章を読んで、該当する目盛りに○を記入して下さい。

I あなた自身についてお答え下さい。

	まったく あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえません	やや あてはまる	よく あてはまる
1. 人がたくさんいると神経質になる。					
2. ちょっとしたことでも、すぐどぎまぎする。					
3. 初対面の人とでも平気で話ができる。					
4. 人と目が合うと自分の方から視線をそらしてしまう。					
5. はじめての場面では、うちとけるまでに時間がかかる。					
6. ひとまえて話すときは不安感をおぼえる。					
7. 人に見られていると仕事がうまくできなくなる。					
8. 仕事をたのまれた時、そのやり方をいちいちきいてやる。					
9. 何かをするとき、人からやいやい言われるまでしない。					
10. 仕事をするとき、手伝ってくれる人がほしい。					
11. 自分のことは自分でできる方である。					
12. 他人からさしずをうけるのがきらいである。					
13. 何かを決心したとき、他の意見によって決心をかえることが多い。					
14. 自分のやったことを後悔する方である。					
15. さがしものをしなければならぬとき、人に手伝ってもらうことが多い。					
16. 自分の意見をおしつけるよりもきく方である。					
17. 何かをするとき、たいいてい自信をもってやる。					
18. うちの人と一緒に遊んだり外出したりする。					
19. ちょっと小言をいわれるとかなしくなる。					
20. 一人で留守番するのはさびしい。					
21. 親のいいつけは素直にまもる。					
22. 一人だけで時間を過ごすことが多い。					
23. 友達にもの貸したり共同でひとつのものを使ったりする。					
24. 自分のしたことを人からほめられると非常にうれしい。					
25. 自分がやさしい人間だと思う。					
26. 知らない人の前でも平気で話ができる。					
27. 他の人の意見に賛成することが多い。					

II あなたが、いろいろな人とのつきあいの中で、これらの行動がどのくらいできるのかお答え下さい。

	まったく 出来ない	出来ない	どちらとも いえない	やや 出来る	よく 出来る
1. 自分の気持ちを正確に相手に伝える。					
2. 相手のしぐさから気持ちを読みとる。					
3. 自分の気持ちや感情をコントロールしながらつきあう。					
4. 会話をうまくすすめる。					
5. 話をしている相手の気持ちのちょっとした変化を感じとる。					
6. 自分を抑えて相手にあわせる。					
7. 感情を素直にあらわす。					
8. 言葉がなくても相手のいいたいことがなんとなくわかる。					
9. 気持ちを隠そうとしても表にあらわれる。					
10. 身振りや手振りをうまく使って表現する。					
11. 嘘をつかれても見破ることができる。					
12. いわないつもりでいることをつい口に出す。					
13. 自分の気持ちを表情や目に表わす。					
14. 相手が自分をどう思っているかを読みとる。					
15. 相手の言うことが気に入らなくてもそれを態度にださない。					

No.

実施年月日 1997年 月 日 (時間 :)

測定のお手伝いの方とは初対面ですか。 はい いいえ

「測定のお手伝いの方」の印象についてお尋ねいたします。以下の文章を読んで該当する目盛り
○を記入して下さい。

	あてはま らなく ない	あてはま らない	どちらとも いえない	やや あてはま る	よく あてはま る
1. 気が合いそうだ。					
2. 安心して頼みごとができる。					
3. 親しみやすい。					
4. 信頼できない。					
5. 温かい。					
6. 好ましい。					
7. 気がねがない。					
8. 消極的である。					
9. 人なつっこい。					

宮島直子

10. 正直である。
11. 誠実である。
12. 感じがよい。

ご協力ありがとうございました。